

## ●IUPS 教育ワークショップ

群馬大学応用生理学 鯉淵 典之

このたび、IUPS リオデジャネイロ大会のサテライト企画として行われた IUPS & ADInstruments Teaching Workshop 2017 に参加してきましたので、報告いたします。非常に刺激的な経験ができました。会場は Armação dos Búzios というリオデジャネイロから車で約4時間の海辺のリゾート地にある Hotel Atlântico Búzios Convention & Resort というホテルのコンベンションセンターで、ほぼ合宿研修状態でした。

8月5日、IUPS 終了後、4台のバス(3台は Scientific Session 終了後に出発、1台は閉会式終了後に出発)を連ね、ブジオスまで移動しました。ブジオスはリオ近郊の漁村を開発して作られたリゾート地で、大小のホテルとシーフードのレストランが並び、少々殺伐としていたりとは全く異なる環境で、気持ちもリラックスできました。

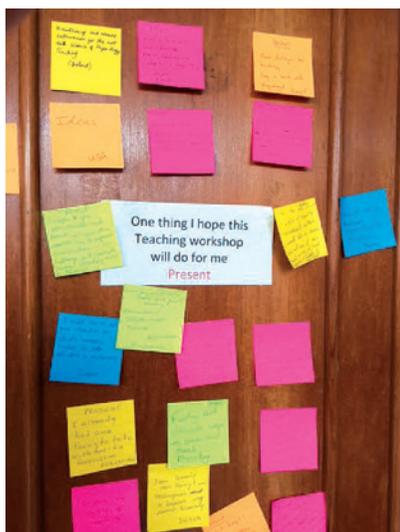
ワークショップの参加者は約150名で、IUPS リオ大会の参加者が約1,500名だったことを考えると一割の参加者が教育ワークショップにも参加したことになります。日本からの参加者は私と近畿大名誉教授の松尾先生の二人だけと少なかったのが残念でした。

8月6日の朝、まず、ポストイットにワークショップの到達目標を書くところから始まりまし

た。そして最終日にそれが達成されたかどうかをまたポストイットに書いて貼る、という作業もありました。目標を設定した後、本格的にワークショップが開始されました。ワークショップの基本は選択したテーマについて5~10名の小グループに分かれての約2時間の討論です。そして同じテーマを選択した各班のプロダクトを小グループの代表が発表し、各テーマ内で情報を共有する、という繰り返しになります。

私はまず、「Integrated Curriculum (統合型カリキュラム)」というテーマに参加し、アメリカ・イギリス・日本・ナイジェリア・ガーナ・ブラジル・インドネシアと全く異なる地域からの教員・研究者・大学院生と討論をし、「統合型(例えば生理学・解剖学・臨床医学の統合型)カリキュラムをうまく運営するためにはどのようにしたら良いか」ということについて各国の状況を報告し、議論を交わし、プロダクトを発表しました。同じような方式で、午後は Team-based learning、8月7日の午前は生涯教育、午後はアウトリーチと4つのテーマを選択し、参加しました。

テーマ全体を通して、生理学教育というよりは医学・生命科学教育全般についての教育手法に関する議論が多いと感じました。それぞれの国で異なった手法・時期(学年)に生理学教育を行っており、討論当初はグループ全体としての意見統一は難しいのではないかと感じましたが、実際に行ってみると、抱えている問題点は非常に似通っており、プロダクトの作成は容易でした。どのような手法であれ、いかに学生たちに能動的学習をさせるか、知識以外の部分(態度や応用力など)



ポストイットに書いて貼る!



小グループによるワークショップ



Diversity Party!

をどう評価するか、ということが話題の中心でした。コミュニティに対するアウトリーチ活動も学生のモチベーションを上げるために用いられている国が多いことは特に印象的でした。日本の学部学生たちはあまり勉強しないとよく言われますが、他国の学生たちも、要はカリキュラムに沿って学習しているだけで、学習意欲という点ではさほど差がないのではないかと感じました。北米の大学のある教授が言った、“Students are not lazy, just strategic”という言葉が印象的でした。会期中はほぼ丸1日話し通しで、夜はぐったりと疲れ、よく眠れました。

8月7日の夜は恒例の Diversity Party という各国の民族衣装を着てのパーティが行われました。浴衣は一人だけでしたのでそれなりに目立っていたようで、ステージの中央に引っ張り出されてサンバを踊らされ少々慌てました。アルコールの力をちょっとだけ借りて乗り切りました。とにかく「話す」というのがメインテーマで、一つのホテルで丸3日缶詰めになってのワークショップでしたので、多くの新しい友人ができ、アジアの方たちとは神戸での再会を、欧米やアフリカの方たちとは4年後の中国での再会を誓い合って帰途につきました。

討論形式のワークショップは日本でも大学のFDなどで開始されていますが、まだまだハードルの高いものかもしれません。語学の問題というよりも、やはり「慣れていない」というのが、口数が少なくなる原因でしょう。ワークショップにはアメリカ人など英語を母国語とする方たちも参加していますが、多くは「英語は外国語」である人たちです。日本人なら「うっ！」と思うような英語で、また、テクニカルタームを知らなくとも、どんどん意見を述べ、討論に加わってきます。ビビらず、恥ずかしがらず、われわれも見習わなければならない態度です。日本でもこのような機会をぜひ提供し、Brain Stormingに慣れていただきたいと思いました。FAOPS2019の教育ワークショップも同様の形式で行うつもりです。皆様方の積極的なご参加を期待しております。